

島文化と歴史に浸る一日

(街中～寺社～ハイキング～博物館)



所要時間：90分（ガイドの説明込み）

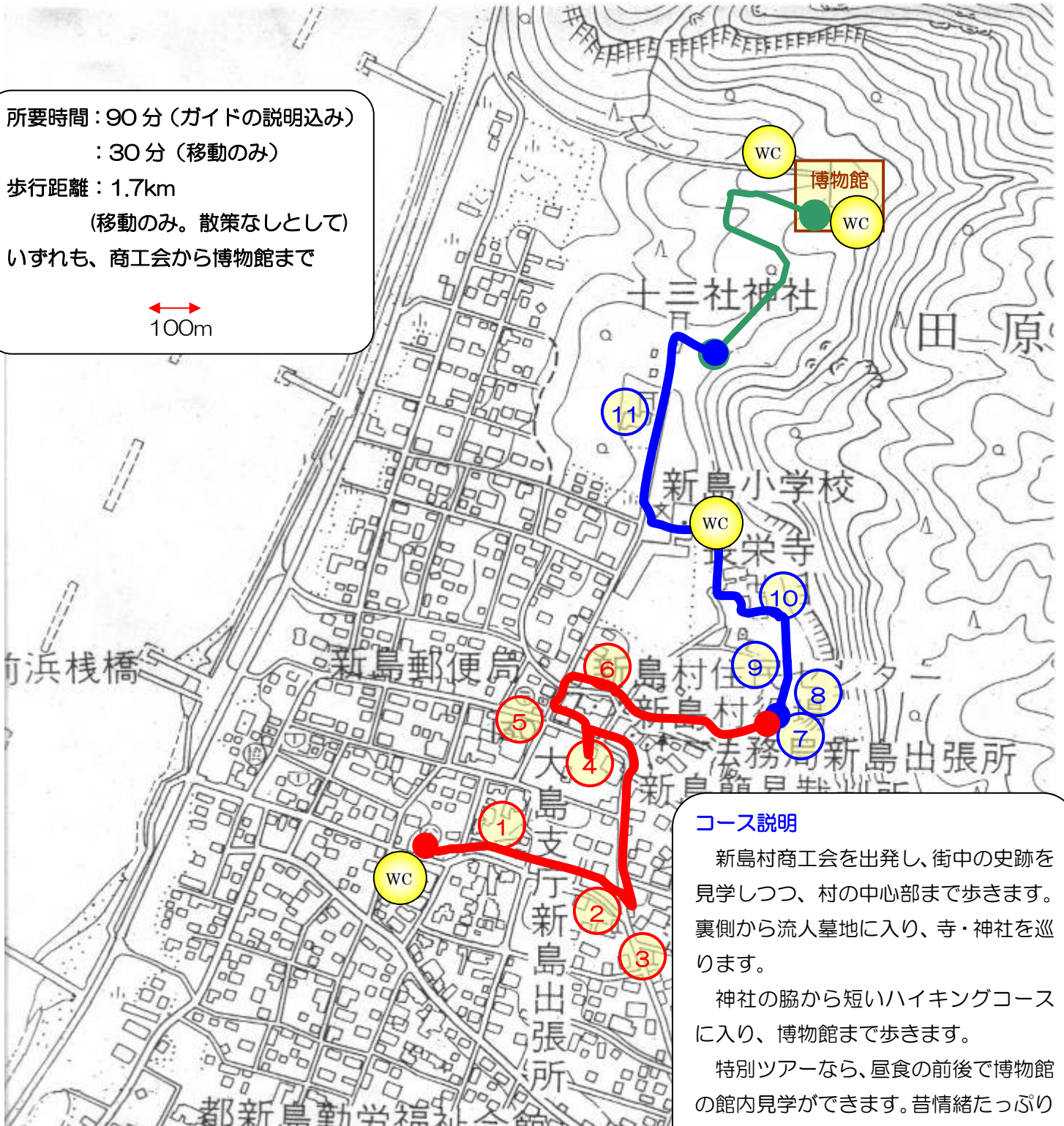
：30分（移動のみ）

歩行距離：1.7km

（移動のみ。散策なしとして）

いずれも、商工会から博物館まで

100m



コース説明

新島村商工会を出発し、街中の史跡を見学しつつ、村の中心部まで歩きます。裏側から流入墓地に入り、寺・神社を巡ります。

神社の脇から短いハイキングコースに入り、博物館まで歩きます。

特別ツアーなら、昼食の前後で博物館の館内見学ができます。昔情緒たっぷりの古民家で昼食をとることができます。

このモデルコースのおすすめポイント！

- ・ ガイドなしの散策では見落としがちな史跡を見学でき、身近な歴史文化が感じられます。寺～神社～博物館を一度に回る、雰囲気も見所もたっぷりのコースです。ゆったりとした歩きが中心で、足腰に負担をかけません。観光をしつつも、近道を使って博物館にいけますので、効率よく観光できます。

博物館周辺

みどころ：広く清潔な博物館館内には、新島の地質から歴史文化まで幅広く常設展示されています。

屋外にも、石倉や古民家があり、自由に入って見学ができます。古民家で休憩もできます。



ハイキングコース（神社裏手～博物館）

みどころ：神社の裏手から、博物館まで抜けるハイキングコースです。街中から少し外れただけですが、木々が風に揺れる音、小鳥のさえずりなど、自然の音に包まれます。短いながらも充実したコースです。



寺社散策コース（流人墓地～寺～神社境内）



みどころ：白砂が敷き詰められたきれいな墓地を横切り、新島の寺社仏閣にゆっくりと触れることができます。

- ⑦ 新島の共同墓地
- ⑧ 飛騨んじいの墓
- ⑨ 流人墓地
- ⑩ 長栄寺
- ⑪ 十三社神社

まちなかコース（商工会から流人墓地まで）

みどころ：石造りの家屋と史跡を見学できます。

- ① 半鐘森
- ② 流人牢屋跡・見返り柳
- ③ 謎の榎、刑場跡
- ④ 為朝神社
- ⑤ 道祖神
- ⑥ 諏訪大明神



1. 街中

スタート地点は商工会。出発前にトイレ休憩をしておきましょう。外壁はすべて新島産『抗火石』（こうがせき）です。ぜひこの質感を覚えておいて、いくつ町並みに使われているか探してみましょう！

建物に向かって右手の道路の塀にも抗火石の彫刻が並んでいます。苔むして落ち着いた感じがしています。



①まずは坂を上って、半鐘森に向かいます。半鐘森は本村集落で一番高いところにあり、集落を見渡すことができます。上り坂はここと神社境内の階段、博物館前の坂だけです。



新島地質マメ知識

Q：本村地区の集落は平べったい地区にありますが、この低地はいつごろできたの？

A：西暦 886 年の向山火山の海底噴火に始まる火砕流によってできました。

半鐘森からは、地内島・式根島・瀬戸山・峰路山・赤峰峰・大磯・向山の7つの火山が見えます。新島は火山の密集地帯ですね。

半鐘森は、新島の前浜から飛んできた細かい砂によって高く盛り上がった内陸砂丘です。海風とあいまって、海岸に咲いている植物がここでも見ることができます。

②、③T字路の民家の脇に、流人牢屋跡の石碑があります。石碑を少し回りこんだ坂の上に説明文があります。



流人牢屋跡 新島村指定文化財（旧跡）
流人が島に来てからまた大きな犯罪を犯した時は、牢屋に入れ、江戸代官所に届け出て、その間、牢番によって厳しく見張られ、いよいよ処刑される日は牢屋敷の門前に生えている柳の木の下へ筵（むしろ）を敷き、その上に処刑者を座らせて、この世の最後のごちそうとして酒を飲ませ団子（だんご）を食べさせた。足取りも重く、刑場に引かれて行く受刑者は道の中程で立ち止まり柳のあたりを振り返って見たという。

それでだれが言い出したともなく、この柳を「見返りの柳」と言うようになった。この古い柳はその後、度々たびたび台風で折れたり傷んだりして、今は根本の部分が残っているばかりで、昔の流人の姿等が偲（しの）ばれる。江戸時代はがっちりした牢屋があったと言つが、現在は住宅が建ち、昔の牢屋敷跡のようすも見られない。この「流人牢屋跡」は流人に関する資料として必要な事跡の一つである。



③～④ 坂を下っていくと、突き当たりの T 字路までの右手に抗火石作りの石蔵があります。ひさしや鬼瓦も見物です。

④為朝神社：新島村役場の向かいに石碑があります。この左手が入り口です。奥に民家が見えますが、どうぞお入りください。中には為朝神社と立派な銀杏の木があります。木陰のベンチで休めます。



⑤道祖神：まさに村の中心、新島村測量基点がある郵便局交差点の角に、島の交通を見守る道祖神があります。旅の安全のお参りをしていきましょう。

⑥瀬戸大明神：郵便局、ブッサンストアを左手に見て進み、すぐ右折して役場の裏手に回ります。役場の反対側にある小さい階段を上った先に瀬戸大明神があります。

小さな社ですが、苔むしていて抗火石の風情が出ています。新島の政治を司り、昔から役所に置かれていました。



角まで進み、正面右側にある法務局・家庭裁判所の裏の小道を進んでいきましょう。抗火石の石壁や、木の電柱がお出迎えする趣のある昔風の小道です。さあ、新島の歴史散策のハイライトです。抗火石の石畳を歩き、共同墓地に入りましょう。



2. 流人墓地～長栄寺～十三社神社



⑦共同墓地内は、いつも羽伏浦海岸から運んできた白砂がきれいに敷かれており、墓地とは思えないほどの明るさと、苔むした抗火石の鮮やかな対比が印象的です。

新島マメ知識

Q：共同墓地はなぜ白砂できれいななの？

A：本村の共同墓地は、羽伏浦海岸の白砂を使っています。特に『しょばな』といいまして、渚で波に洗われている砂を使っています。

新鮮で清められた砂ということで、行事ごとに砂を入れ替えては墓地をきれいにしています。

新島には、いんじい、うんばあ（おじいさん、おばあさん）達が毎日通ってお花を手向けたりお墓を掃除したりきれいにする『だんとう』の習慣があります。

⑦共同墓地の一角に、上木甚兵衛のお墓があります。江戸時代（1771年～1778年）の大原騒動（飛騨国の一揆）に端を発する新島の流人とその息子の孝行物語が垣間見られます。



飛騨んじい（上木甚兵衛）の墓

上木甚兵衛は、農民の一揆の首謀者として安永4年（1775年）、飛騨高山から配流された。新島では島の子供達に文字の読み書きを教えたことから、島民達は親しみと敬意をこめて、『飛騨んじい』と呼んだ。

甚兵衛は61歳の高齢であったために、父を案じた息子、勘左衛門は、自ら望んで新島に渡り、病床に伏した父の看病をしながら、島民の手伝いや行商をして生計をたてた。

父を慕う息子は、自分の石像を造って父の墓に並べ、今も菩提をとむらい続けている。

⑨流人墓地

共同墓地のはずれに、流人墓地があります。さまざまな罪状や個性ある流人たちを弔うため、酒樽や博打のお椀など、抗火石がさまざまな形状の墓石となって今も残ります。



流人墓地(るにんぼち)

新島村指定文化財(史跡)

新島村本村にある共同墓地の中央の一段低い所に流人墓地がある。江戸時代以前の大昔に罪を犯して島に流された罪人や墓地については確かな記録がないのでわかっていないが、その後書かれた「新島流人帳」には寛文8年(1668)4月から明治4年(1871)12月まで203年間に1333人が流されている。

それらの人たちの年齢や身分はいろいろさまざままで武士、百姓、町人、神官や僧侶、医師、奥女中、遊女、無宿者等が赦免されないうちに病死した人たちは500人、赦免された人は1000人で、その他の人たちは島で再び罪を犯して死刑になったり、牢屋に入っているうちに病死したり、船中死や自殺したりした。

流人の中には学問のある人、優れた技術を持っている人も大勢いた。こういう人たちは島に流されている間に島の子どもたちに文字や学問を教えたり医者として病気やケガを治したり、島の人たちにいろいろな技術を教えたりして、島の人たちの生活に役立つように力を尽くした。島の人たちは自分たちが食べるものすら足りなくて苦労したが、自分たちの食べるものをさいて、これらの人たちに食べさせた。

流人の中には日々の憂うつな気持ちを酒やバクチにまぎらわしていた者も少なくなかったが、いっしょに流された仲間が亡くなると、酒が好きだった人の墓石を「酒樽」の形にしたり、「酒」という文字を墓石に刻んだりして霊を慰める人もいた。

流人の墓石は、流人の世話をしていた村の五人組の中の親しくしていた人たちの好意によるものと言われている。

流人墓地に通じる墓路(はかみち)は墓地の西北の隅にある。入り口に供養塔があり(台座、塔身共23)「流人一統先亡後滅諸靈魂」と刻まれて、「寛政5年正月、19世日養供」と記されている。昔は共同墓地と流人墓地は樹が植えてあって、通り抜けは出来なかったと言われている。

新島では流人で赦免されないうちに病気で亡くなった人は「流人墓地」に葬られ、島で再び罪を犯して処刑された人は「処刑場」の墓地に埋葬されている。島の流人関係を知る上で、この二カ所は貴重な資料となっている。



⑩長栄寺：

新島を代表するお寺、長栄寺にお参りしていきましょう。長栄寺は文化庁の無形文化財である盆踊りなども開催され、隣にある十三社神社と並び、島の文化・交流の拠点となっています。

お寺の門を一段降ります。向かいには抗火石づくりの橋と入り口の門が見えます。お寺に向かって左手(写真でも左側)に進みます。

小学校のグラウンド脇を通過して、校舎と体育館の間から小学校駐車場・神社入り口に抜けていきます。

子供たちとすれ違ったら、新島のことについて気軽にたずねてみてください。もしかしたら、子どもたちしか知らない「おすすめスポット」を教えてくださいませんか。

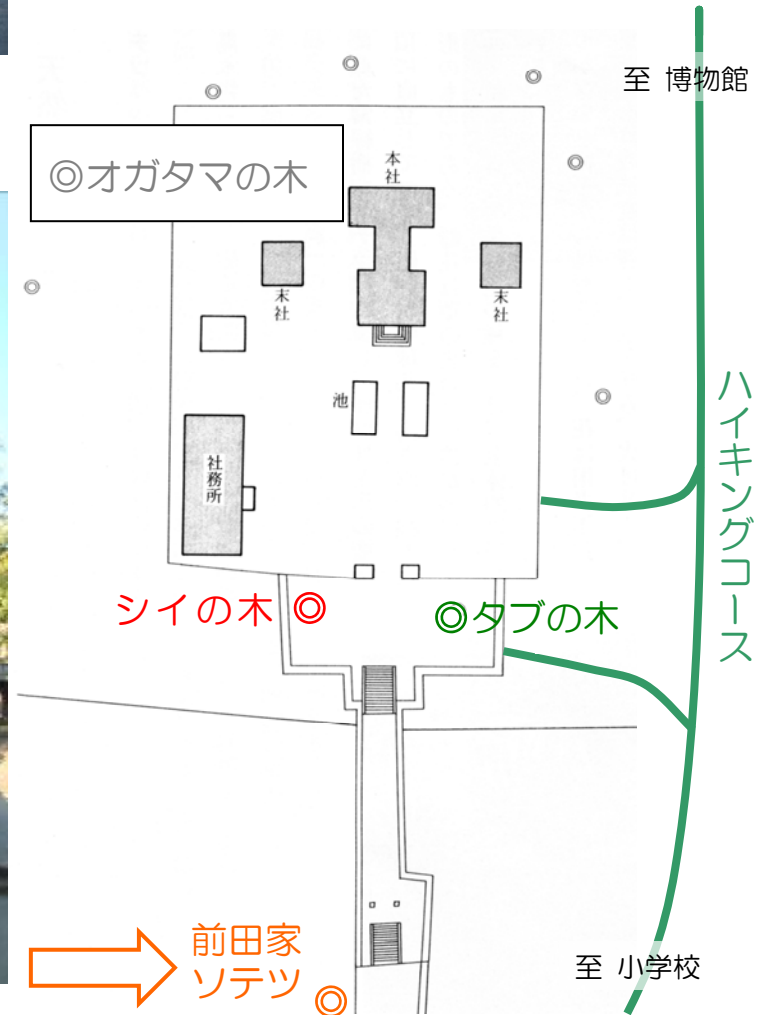




⑪十三社神社

新島の十三社神社は伊豆七島を開かれた事代主命をはじめ、后神、御子神等 13 柱の神様を集め同列に奉祀されている総社です。

十三社神社では、抗火石づくりの社や中庭だけでなく、巨木の観察などもできます。



前田家のソテツ

蘇鉄は南方系のヤシに似た常緑樹でソテツ科に属し、雌雄株が形の変わった花をつける。雄株は幹の一番上に直立した形でつき、丸い筒の形をした花で、高さ 40cm~60cm、直径は 10cm くらいのものである。雌花は上に群がってつき、外側に広がり内部にクルミくらいの大きさの朱色の種をつけ、全体的に円味を帯びた扁平の形をしている。

繁殖は雄花の花粉がつかないと種子からは育たない。花は相当年数の古株でないと咲かない。また幹が伸びるには長い年月がかかる。育つのに鉄分が利き、火に強くて、水分がなくても枯れるようなことはほとんどない。

日本では沖縄、九州南部に自然に生えている。普通には鉢植、盆栽等で観賞用として栽培され、自然の大株の蘇鉄は静岡県あたりが北限とされている。

新島にある蘇鉄はすべて雌株であって雄株は一本もない。社寺または特定の家にあるが、いつの頃か、どのような経路で入手したのかわからないものが多い。前田家のものもわからず、十三社神社と共に本郷にあったが、慶安元年（1648）の大火のために現在の地に移植した。その時元の屋敷にあったものは相当大きな株で移動するのに道路が狭く、また株が重いので困難を極めたと伝えられている。それから現在まで360年を経ているが今なお樹勢強く少しも衰えていない。しかも株の成長は数十年経ってもほとんどわからないくらいで、長年の樹齢であることが想像される。

昭和32年7月東京都が伊豆諸島文化財総合目録調査を行った際、樹齢1200年以上と推定された。全体の樹形としては上部が重いため、自然に倒れ、中心の幹は90度近くも慢性的に傾いていた。その後昭和44年5月に根本の周囲を掘り起こし、立て直した。これが現在の姿であり、高さ7、9m、支幹1m以上のもの12本、50cm～1mのもの70本、50cm以下約50本も付いている。

神社のタブの木

タブの木は海岸に近いところに多く、クスノキ科の常緑高木で、イヌグスとも言い、新島では古くからタミの木と呼んでいる。

用途は建築、家具、皮は粘結材、漁具塗料等に利用し、実は江戸時代、食糧に困ったときは加工して食糧とした。

島々の縁起として伝えられている古書に「薬師の化身の王が食を乞われたときに出されたのに、これは何と申されけるやと問はせけるに、翁是はたみと申すと言ひければ、おいしいものにてありけりとて、我居住の所に植んとて七つぶもたせ給ひける」とあり、また後の下りに「明神十の島を焼かせ給ふ。後かの島々に名をつけ給ふ。一番の島をはじめの島と名付け、この島にたみの種類給ふ。二番の島をは中にやき出、彼島に神達をあつまり居て島々やき給ひける。せんきし給ひければ、是を神あつめの島と名付けたり。三番の島をばしま大なるゆへに大島と名付けたり。四番目の島は塩のあわをよせてやかせ給ひければ島の色白かりけるによりてあらた島と名付けたり……」とあり、たみの木が島の出現に深い係わりを持っていることがわかる。

神社のタブの木は樹齢500年近く、木の先端はやや枯れているが、樹精強く、新島に現存するものでは最も代表的なものである。殊に地表に出ている本木の周囲には多くの根瘤が一面に出ている珍しく、他に類を見ない。

江戸時代、流人を抱えて飢えに苦しんだ時、たみの実を食し、あるいは中の種子を粉にして食糧にしたと言われ、新島ではこれを「タミだんご」といった。

オガタマの木

ほぼ本州中部から南の暖かい地方に分布する常緑高木で、モクレン科に属し丈が高くなる。

葉は厚みがあって、つやがあり花は春先に枝の先に一つ花を付ける。花が変化するに従い中央に雄しべ、雌しべが集まり、やがて赤い実が重なって松かさ状となる。神聖な木として神前の行事に用いられる。

新島にはこの神社の境内にだけあって他の場所では見ることができない。どの木も大木で十数本あって、丁重に扱われている。



神社のシイの木

日本列島の中部から南の暖かい土地に育成する常緑高木であり、伊豆諸島にはこの木はたくさんある。木の質は堅く腐りにくく、建築物の土台や船の骨材等によくて、防風防火に強く、家屋の周辺に植えられている。

花は5・6月ごろ新枝につき、雌雄同株で黄色で、強烈な甘い香りがあり、虫媒花(虫によって仲立ちされる花)である。実は堅い皮に包まれ、中の実は白くて好んで食べられている。

昔は、シイの実を集めて土地の物産として江戸に出荷したこともあり、特に菓子製造に貴重な原料として喜ばれていた。また幹は最も優れたシイタケの原木として使われている。

神社のシイの木は、現在新島に残っている木のうち最も大きく樹齢500年以上と言われ、樹精よく四方に広がり、主幹は真っ直ぐ、形態もよく見事なものである。根本は高さ1mくらいの抗火石造りの石垣で囲まれており、鉢に植えられている如く見事である。

いかにも古びて見える神門の中にある2本のタブの木と共にシイの大木が厳かな雰囲気を保っている。

3. ハイキングコース

博物館へのハイキングコースでは、いろいろな動植物を見ることができます。

自然ガイドと一緒になら、ぜひ聞いてみてください。

ハイキングコースから外れないようにご注意ください。



フートウカズラ



アオノクマタケラン

この観光マップは未完成です。
ぜひ、一緒に作り上げませんか？
ご協力よろしく願いいたします。

【この観光マップの特徴】

- これだけで使える観光マップ。地図も、わかりづらい道順も、説明もすべてあり。
- 持ち歩ける大きさで。A4 を二つ折り
- 新島情報が一度にわかる！
- 歴史・地理・文化・風習がつながっていることを実感できる！
- コースとして、休憩、食事などの場所がわかりやすい！
- テーマがはっきりしているコースにして、あれもこれも詰め込みすぎない
- 別のテーマであれば、また別のコースを作りましょう！

【目標とするお客様とサービス】

- 徒歩のお客様。立ち止まって見学できる観光（観光バスの団体旅行ではない）
- 物語性のある史跡めぐりと、博物館への誘導。（博物館はエコミュージアム構想の中心）
- 近道（寺⇔神社、神社⇔博物館）をしつつも、見所満載
- 博物館古民家でのお食事サービスの実施

マップのご意見、別のコースのご提案など、
お気軽にご連絡ください。

製作：新島村商工会 シナジースキーム事業
『もやいの絆』事務局
TEL 04992-5-01167
e-mail:moyai@niijima.or.jp
担当：木村諭史

～デジタルデータ（PDF 版）が必要な方はお気軽にご連絡ください～